にぎやかな悪霊たち

都筑道夫

講談社文庫

講談社文庫

定価460円

にぎやかな悪霊(あくりょう)たち
都筑道夫(つづきみちお)

昭和57年7月15日第1刷発行
昭和58年9月30日第4刷発行

発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策・菊地信義
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　加藤製本株式会社

© Michio Tsuzuki 1982

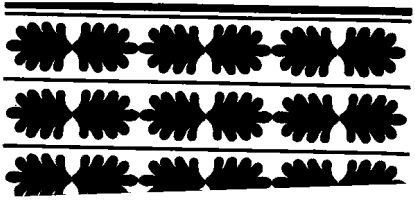
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-136236-4 (O)

講談社文庫

にぎやかな悪霊たち



目次

蠟いろの顔　七
湯気の中から　三七
黒く細いもの　六一
騒ぐ霊　八七
女嫌いの女の絵　一一三
幽霊坂マンション　一三九
出雲ぎつね　一六五
激写あの世ヌード！　一九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

モンロー変化　二一七
男の首　二四四
化けかた教えて　二七一
水わり幽霊　二九八
人形たちの夜　三二五
夜の猫は灰色　三五二
離魂病診断書　三七八
解説マンガ・不思議大ツヅキ　高信太郎　四〇五

にぎやかな悪霊たち

蠟いろの顔

I

「それがその、男の幽霊でして、のぞくんですよ、夜になると」

石田鉄雄と名のった若いサラリーマンは、妙にいいにくそうに、事情をのべはじめた。オカルト評論家の出雲耕平は、机に左肘を立てて、軽くにぎった拳から突きだした親指を、左の頬にあてながら、ゆっくりとうなずいた。おれの相棒のカメラマンの亀田が、このポーズで、すごく神秘的なポートレートをものして以来、なにかというと、先生、その恰好をしてみせるのだ。

「なるほど、のぞくわけね、窓から」

「いえ、窓からじゃないんですよ、先生。その、つまり、私のうしろから、のぞくんです。どうも、その、ちょっと話しづらいんですが……」

膝の上でもてあそんでいたハンカチを、石田は困ったように額にあてた。ストップウォッチつきの腕時計の、女みたいに手首の内がわにまわしてある文字盤へ、ちらっと出雲は視線を走らしてから、

「この鶴来君なら、大丈夫。ときどきアシスタントをつとめてくれて、心得ています」

と、おれのほうへ顎をしゃくって、
「ぼく同様に、口はかたいから、プライヴァシイ問題のご心配はありませんよ。実はこのあと、某綜合雑誌のインタヴューがあるんで、お話は手短かに、具体的にお願いしたいんですがね」
某綜合雑誌というのは、おれが記者をつとめている雑誌のことだろう。たしかに社会問題もあつかえば、海外のニュースもあつかうし、スポーツや学園問題に取材したページもあるから、綜合雑誌といえるかも知れない。けれど、社会問題は超能力少年のことだし、海外ニュースは空飛ぶ円盤、スポーツマンや学生は漫画のなかで大活躍する児童むき週刊誌だ。
「申しわけありません。フランクにお話しすることにします」
と、石田は恐縮して、おれが推察した通りのことをいいだした。
「セックスをしているときに、私のうしろから、顔をだして、妻をのぞきこむんですよ、その幽霊は」
「男の霊だといいましたな?」
「ええ。そんなわけで、私はぜんぜん気がつかなかったんです。妻も最初は、気にしませんでした。というのは、私たち、まだ結婚して間がなくて、未熟なんです。ことに私のほうが、セックス音痴といったところがあって、なかなか妻を満足させられないんで——つまり、早すぎるんですなあ。それで、まあ、頑張りまして、雑誌などを参考に、寝床に入る前に好きでもない酒を飲んでみたり、風呂場でマスターベーションをしてみたり……」
いったん話しはじめると、石田は臆面がなくなって、スーパー・ナチュラルな悩みを訴えにきたはずなのに、ことはスーパー・ナチュラルになってきた。

「ある晩、持ちこたえられそうもなくなったとき、目をつぶって口のなかで、ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレ、カイジャリスイギョノスイギョーマツ、とやってみたんです。学生時代に、ちょっと落語研究会に入ってたことがあるもんですから――それで、クウネルトコロニスムトコロ、パイポパイポっていう調子にあわして、運動を続けていたら、がぜん妻が燃えましてね。いやあ、女ってこういうものかと思って、驚きました。興奮が鎮まったあとで、しあわせそうに、なにがなんだかわからなくなって、あなたの顔がふたつに見えた、というんです。私は大いに自信を持ったんですが、実はとんでもない……」

「それが、霊の顔だったわけですな」

出雲がいつもの癖で、わかりきったことをもったいらしく口にすると、石田はくちびるを歪めて、

「そうだったんです。でも、しばらくは気がつきませんでした。次のときにも、妻は頭のなかで渦が巻いてるみたいになって、快感があふれだした瞬間に、私の顔がふたつに見えた、というんですが……なんどめかの晩に、やっとわかったんです。まだ興奮状態になりきらないうちに、妻が悲鳴をあげたもんで――つまり、いくらか大胆になって、自分からネグリジェをぬぐようにもなったし、目をあいているようにもなったんで、見えたんですね。悲鳴をあげて、まっ裸のまんま、外へ逃げだそうとしたんだから、あわてました」

「どんな顔が見えた、とおっしゃるんです、奥さんは？」

「口ではいえない、というんですよ、それが――目鼻立ちなんぞは、はっきりしないらしいんですけど、とにかく男で、正視してはいられないような、いやな顔なんだそうです。私には見えな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いんで、錯覚だろうっていって、なだめたんですけれど、その次のときにも現れたんで、もういけません。妻はすっかりおびえてしまって、昼間ひとりでいるのも嫌だ、といいだす始末です。病人どうようですから、私が二、三日、会社を休んだんですが、どうやら昼間は出てこない。それで、いちおうは落着いたんですけど、セックスするのを嫌がるようになってしまって、ぜったい応じないんですよ。そんな不自然な状態のまま、ほうっておくわけには、いきませんからねえ。先生がこういうことの相談にのってくださるって、いつかテレビでおっしゃっていたのを思い出して、うかがったというわけなんです」

「ふつうに寝ているときには、霊は出現しないんですか？」

「それは……わかりません」

「どうして？」

「つまりですね。私は会社で神経をつかってますんで、床へ入って灯りを消してしまえば、すぐ前後不覚ってわけなんです。トイレに起きることも、まずありません。妻はこうなって以来、安眠めがねをかけて――マスクみたいな、目んとこにかけるやつ。あれをかけて寝て、ちょっとでも眠れないと、医者にもらった睡眠薬を飲むんです。ですから、出てもわからないんですよ。昼間は出ないってことが、確実なだけでしてね」

「完全に寝こんだ人間を起すほど、霊の影響力が強くないわけですな。さもなければ、これは心霊現象ではなくて、奥さんのノイローゼかも知れませんよ。セックス恐怖症とでもいいますか」

出雲はもっともらしく、一語一語、くぎったいいかたをしながら、卓上メモにボールペンを走らした。台が斜めになっているので、前の石田には見えないが、机の横にいるおれには、なにを

書いたか読むことができる。おれに読ませるために、書いたらしい。昼間、夫の留守に強姦されたか？　と大きな金釘流がならんでいた。

ちらっと出雲がこっちを見たので、おれは首をかしげた。そうした災難にあったのを、だれにも隠していて、夫との行為もできなくなる、ということは、あるかも知れない。だが、行為を拒否する口実に、幽霊を持ちだすのは、手がこみすぎている。口実だとすれば、われをわすれて夫の顔がふたつに見えた、というのは伏線なわけで、絶頂をきわめたような芝居をなんどもやれたということは、大きな矛盾だろう。

「たしかに、一種のノイローゼかも知れません」

と、石田はすなおにうなずいて、

「でも、実は妻に心あたりがあるんです。妻はその、なんといいますか、男好きのするたちでして、やたらに結婚を申しこまれていました。その相手のなかに、気違いじみたのがひとりいまして――といっても、内向的に気ちがいじみてるんですが、その男が半年ばかり前に、蒸発してるんですよ。自殺したにちがいない、と妻はいっているんですが……」

「霊の顔が似ているんですか、その男に？」

「似ているような気がする、といっているんですけれども……ここに、写真を持ってきてみました」

石田は客用の椅子から腰を浮かして、小さな写真を一枚、机の上においた。出雲はそれを眺めながら、またメモ用紙に、使えるかも？　と大きなへたな字で走り書きした。この石田鉄雄という男が、出雲オカルト研究所へ現れる前、おれたちは雑誌の次回のテーマを相談していた。おれ

が担当している『いずもオカルト・レポート』の次の回で、なにをとりあげるかを、話しあっていたのだ。

「鶴来君、インタヴューをあすにのばすように、連絡してくれないか。いま六時十五分すぎだから、まだ向うは出ちゃいないだろう。石田さんのお宅を、拝見したほうがよさそうだ」

「わかりました。カメラもいるでしょう、先生」

と、おれは隣りの部屋へいって、このビルの一階にある喫茶店に、電話をかけた。そこでひまをつぶしている亀田を呼びだして、

「どうやら、テーマがきまりそうだよ。いまから、取材に出かける。おれたちは、大先生のアシスタントだから、そのつもりでな」

ここ数週間、海外だねがつづいたので、日本のものが欲しいところだった。夫婦がいちゃいちゃしていると、のぞきにくる幽霊の話では、児童雑誌むきではないが、読者には大学生もいるのだから、多少のエロティシズムはかまわない。それに、プライヴァシイの問題があるから、どうせ事実どおりには書けないのだ。

II

石田鉄雄の住居は、練馬区にちかい武蔵野市のはずれにあって、まだ新しいマンションの三階だった。その前に、おれが車をとめたときには、夏の空もまったく暮れきって、窓のあかりが爽かだった。だが、街路灯には、蒸暑く羽虫がむらがっている。

「結婚して入ったんで、まる三月しかたちません。建ったばかりのマンションで、以前はこのへ

ん、畑地だったそうですが」
「ほかの部屋にも、幽霊が出るようなことは、ないんでしょうな？」
「そんな噂は、聞きません、もっとも、うちでも黙ってるくらいですから、確かなところはわからないんですが……一階の右から二番めの部屋には、間違いなく出ないようです。あそこの奥さんは大へんなお喋りで、おまけに臆病ときてるから、出たら黙っちゃいないでしょう」
「とすると、土地についている霊ではない、と考えてよさそうですな、まず」
と、出雲は顎をなでた。土地についている霊が、その土地になん十室もある建物ができてしまったら、どの部屋から出はじめるか、どういう基準できめるのだろう、と考えて、おれはにやにやしながら、石田と出雲のあとについていった。
石田の細君は登美子といって、ちょいとしたグラマーだった。花模様のミニに、むっちりした太腿をそろえて、挨拶したところは、セックス恐怖症には見えなかった。むしろ、すぐ欲求不満になるタイプだろう。夜は夫婦の寝室になる六畳に、出雲は案内されると、例によって目をつぶって、
「うん、たしかに感じる。霊の存在を感じますよ」
と、鼻の穴をひろげた。どこへいっても、これをやるのだ。いつぞや本所のほうのスナックのトイレに、幽霊が出るという話があったときにも、出かけていってこれをやって、あとで人さわがせな嘘とわかったけれど、
「いや、ぼくにはわかるんだ。あすこには、霊がついている。噂をひろめたやつは、いやがらせのつもりだったろうが、それは自分でそう思ってるだけでね。やはり、霊に動かされていたんで

すよ」

と、動じなかった。それほど自信たっぷりなので、石田夫婦はおびえた顔を見あわせた。出雲は厚みのあるアタッシェケースから、ドイツ製の液晶温度計をとりだして、畳の上におきながら、

「ほら、温度もだいぶ低い」

「そりゃあ、クーラーがきいているせいじゃありませんか、先生」

と、苦笑を隠して、おれはいった。六畳はベランダに面していて、アルミサッシの戸の上に、クーラーが唸っていたのだ。

「いや、そのせいだけじゃない。たしかにこの部屋には、寒冷点がある」

「主人がお話ししたと思いますけど、蒸発したひとの霊でしょうか、先生？」

と、登美子が聞いた。亀田は勝手にコンセントを見つけて、ライトをつけると、出雲の動きを撮りはじめている。ライトを畳に寝かしているから、きっと陰影のぶきみな写真ができるだろう。出雲はポーズをとりながら、石田夫妻をふりかえって、

「さあ、そこまではまだ、わかりません」

「なんとか出ないように、できるでしょうか？」

石田がおそるおそる聞くと、出雲はアルミサッシをおおったカーテンの、唐草模様を意味ありげに見つめながら、

「活動を鎮める方法は、ありますよ。けれど、霊をとりのぞくということは、実は不可能なんです。呪文やお札は、たいがい気やすめの役にしか立たない。だから、霊の存在に馴れるほうが、

ほんとはいいんですがね。別に霊が現れて以来、からだの調子が悪いとか、肉体におよぼす影響はないんでしょう？」
「それはそうですけれど……」
登美子が不満そうな顔をすると、出雲はそんなことより、もっと重大なことがある、といった口調で、
「とにかく、その蒸発した男の話というのを、くわしくうかがいたいですな」
「それでは、いまお茶を入れてから……」
「ああ、お茶なら、ぼくが入れるよ」
と、石田はダイニング・キッチンに立っていった。おれはそのあとについていって、やかんの湯を魔法壜に移している石田に、
「ちょっと実験をしてみる必要が、ありそうですな。いまのところ、幽霊は奥さんにしか見えない。あなたには絶対に見えないのかどうか、ためしてみたほうがいいですよ」
「どうすれば、ためせるんですか、そんなことが？」
「お見うけしたところ、奥さんは恐怖と欲求不満の板ばさみになって、あんまり好ましい状態じゃないようですね」
「ええ、それで思いきって、出雲先生のところに相談にあがったんです」
「だったら、いよいよ実験するべきだ。ぼくらが帰ったあとで、奥さんをかわいがってあげるんですな」
「でも、それではまた幽霊が……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton